

## タンザニアの北パレ山間農村の変容

著者	吉田 昌夫
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アフリカレポート
発行年	1992-03
出版者	アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00008597">http://hdl.handle.net/2344/00008597</a>

## 北パレ山間農村の変容

●吉田昌夫

### 1 8年ぶりに再訪した北パレの農村

1991年8月、私は8年ぶりに、タンザニア北部のキリマンジャロ州、北パレ山地の農村を訪れた。前回の調査で存在が判明した伝統的灌漑の利用状況を調べ、その水利組織をさらに詳しく理解することが、今回の訪問の目的であった。

アジア経済研究所の池野旬調査員とアシスタントのサイディ・ムンデメ君と私の3人は、2週間の自炊生活に備えてモシの町で食料を買いととのえ、チャーターした車に同乗して、北パレの山道を登っていった。タンザニアでレンタカーを借りることは極端に難しく、ようやくチャーターしたレンタカーは、運転手つきで1日3万5000シリング(約2万1000円)、よくそんなに値切ったと感心された。しかしこの値段は、政府の定めた労働者最低賃金の10カ月分なのである。この車を農村にチャーターしたままにするには費用がかかりすぎるので、目的地に着いたら車は帰してしまっ、中間休みをとる1週間後に迎えに来るようにいってあった。雨水に表面をえぐらて、この車のような底部の高い4輪駆動車でないと通れないような、でこぼこの激しい道を車はあえぎながら登る。やがて尾根筋へ出て、道は少しよくなる。乾期であるにもかかわらずこの年は雨が多く、晴れていれ

ばケニアのタイタ山地まで見通せる尾根からの眺望もきかず、霧のため数百メートル先しか見えなかった。

前回、北パレ山中の町ウサンギを訪れたのは、1983年8月であった。この年は農村の適正技術の調査に来て、伝統的な土器づくりと灌漑農業を見て廻ったのである。その時はウサンギまで電気は引かれておらず、ただ町の中心部にある病院に自家発電装置があるだけであった。病院の横に政府のゲストハウスがあり、そこに2週間逗留したのであったが、今はそこも病院の医師の家になっていた。このため今回は、町中の雑貨屋の裏手に付随した宿屋にとまることになった。

まずウサンギ郡の郡長(Katibu Tarafa)に挨拶に行く。池野調査員は郡内のムシエワ村の調査を1年前から始めており、郡長とも面識がある。私は8年前にここに来たことを説明して、前回に調べた村の中から一村を選択して、伝統的灌漑の水利組織を調査したいと述べ、すぐ了承された。北パレの農村は、一見したところ以前とほとんど変わりが無いというのが、最初の印象であった。

### 2 北パレの伝統的灌漑システム

東アフリカの山地には、リネージあるいはクラン水準の親族組織によってつくられた、重力流下

式灌漑水路を持つ部族がいくつか存在する。パレ族はその一つで、北パレ山地と南パレ山地の双方に、植民地化以前から発達した灌漑水路網を持っていた。北パレ山地は南北に長く約40キロメートルあり、最高峯キンドロコ山は海拔2113メートル、その山間部は人口密度が高く、1平方キロあたり260人にも達する。山地の上部には、泉や小川を水源とする溜池が数多く見られ、それはヌディバ(ndiva)と呼ばれる。ヌディバの規模は大変小さく、通常直径10メートル、深さ1.5メートル位のものであるが、もっと小さいものも見られる。この地方では雨期は年2回あり、大雨期が3～6月、小雨期が10～12月となっているが、パレ山地の灌漑は、基本的には両雨期の間の乾期作のために用いられるものである。

個々のヌディバは建設者の名前で呼ばれているものが多い。ヌディバと、そこから分水するための地表に溝をつけただけの水路(mfereji、英語ではfurrowと呼ばれる)は、小規模の労働力投入で建設でき、また少量の水を有効に灌漑するために使う合理的な技術の好例であると考えられる。ヌディバの水門(石組みでつくられる)は雨期には開けられているが、乾期には水門の栓(木板およびバナナ幹皮で作られたストッパー)を所持する水番(水路の管理人)によって閉められる。するとヌディバは約一昼夜で満水となる。次いで水番が栓を開けると、水は勢いよく水路を流れ下り、前もって順番が定められた農民の畑に達する。このようにヌディバは、乾期にわずかな水量しか流れてこない水を貯めることによって、流下の勢いをつけ、遠方まで水を到達させるタンクのような役割を果たしているのである。

灌漑による乾期作としてとくに重要なのはサツマイモ、インゲン豆などの豆類、サトウキビであるが、永年作物のコーヒーやカルダモンの畑にも

必要があれば通水される。こうして土地の集約的利用度が高まり、高い人口密度を支えることが可能になったうえ、天候に左右される生産の不安定性が軽減されたということができよう。

もともと用水組織はクランあるいはリネージなどの親族組織であったから、メンバーの協力は得やすかった。用水路が作られるとその水路の利用者は、水路の維持管理にも責任を負うことになる。一つの水源を持つ用水路には必ず一人の水番がおかれ、利用者への水配分を司り、維持管理のための労働参加を呼びかける。1983年の調査では、7カ村を廻って用水路を調べて歩いたが、その折の聴きとり調査では、水番には年配者で、信望の厚い、村人に関する知識の深い者が選ばれるということであった。水番になるということは大変名誉なこととされているが、それに対する報酬に類するものは何も支払われていなかった。水番は他の者と同様にその水路を使っている一農民なのである。水番の最も重要な職務は水の分配である。個々の農家世帯の長は、水番に通水の希望日を申し出、水番はメンバーの全員が水を得られるように注意を払い、希望日を調整して、どの農家には何日の午前、午後、あるいは夜間に水を廻すと通告する。水番の呼びかけにしたがって、利用者は共同奉仕(msaragambo)で水路の泥さらいやヌディバの修理などを行ない、維持管理につとめるのである。

パレ山地および山麓における過去200年ほどの住民移動は大変活発で、ある特定クランがつくった水路の近辺に、他クランの人たちが移住してきて混住することも多かった。このような他クランの人たちにも、水路からの水利用権が与えられ、やがて用水組織のメンバーになることが許された。こうしてパレの用水組織は、親族組織から、地縁(近隣グループ)を基盤とした組織へと変化したと見られる。1983年の調査時でも、多くの水番が、ヌ

ディバ建設にたずさわったクランとは別のクラン出身者であった。

### 3 ヌドルウェ村の水利組織の現状

今回の調査では、一つの村を選んで、そこに存在する水利組織を詳しく調べるのが、主な目的であった。それには、伝統的なヌディバがまだ使われており、組織が生きている村を選ばなければならない。私はまず池野調査員の調査対象村であるムシェワ村で、そのような村としては、どこがよいか尋ねてみた。答えは隣のヌドルウェ(Ndorwe)村がよいということであった。最近ではウサンギ郡から若者の流出が激しく、グルエスサラームやモシのような都会へ出ていってしまうので、伝統的灌漑の維持が人手不足で難しくなっているという。しかしヌドルウェ村とチョンプ村では、まだ伝統的な灌漑がよく使われているということであった。しかしチョンプ村は、前首相で現通産大臣のC・ムスヤ氏の出身村であり、そのような政界の大物が出た村を調査することは、さすがにためらわれた。ヌドルウェ村は山を巻いた道がそこで行き止りになる高所にあり、ウサンギ郡山間部では電気のきいていない唯一の村であり、調査に毎日通うには不便ではあったが、しかしそのような辺ぴな所にこそ伝統的なものがよく残っているはずだと考え、まずその村を見に行くことにした。

前回の1983年の調査では、ヌドルウェ村を通った時、その村にあるヌディバの名前のリストを手に入れていたが、実物は見ていなかった。朝早く宿屋から山路を歩くこと約3時間、村の中心部まで来て出会った人に、灌漑水路はどこにあるかと尋ねると、今ちょうど、すぐそこで水路を修理中だという。行ってみると、なるほど5、6人の人が、最近雨で流されてしまった小川の取入口から、

水路を引くための修理作業をやっていた。この水路の名前はマレンゲ・チニ(Marenge Chini)だという。その作業を指揮していた壮年の人に話を聞こうとしたところ、それなら自分の家にとまらないか、といとも簡単にいつてくれた。彼の名前はムヒディニ・サイディ(Mhidini Saidi)といい、この水路の水番であった。宿屋からこの村まで歩く距離を考えると、それは願ってもないことだと思い、2日後に来るから2晩だけとめてくれと頼んだ。こうして私はヌドルウェ村の農家に2晩宿泊することになったのである。

サイディは、村の文化委員会(Kamati ya Utamaduni)の書記であるというだけあって、彼の家は小ざっぱりしていた。奥さんと子供3人の他、牛2頭がおり、土間の部屋には犬と猫と鶏がひっきりなしに入ってきた。この部屋で、私は彼とその弟である小学校の先生、それに文化委員長である老人の3人から、村のヌディバおよび水路についての名前と位置、現在使用中かどうか、その各々についての歴史などを聞き出したのである。会話は小学校の先生と少し英語で話した他は、すべてスワヒリ語で行われたので、判らないことが多く、もどかしかった。しかし少なくともサイディが水番をしているマレンゲ・チニの歴史と、その水利組織のメンバーについてはかなりのことが判った。

マレンゲ・チニのヌディバは以前マレンゲ川の入入口のすぐ下にあったが、雨で破壊され、今は水を小川から直接に引いている。水路の下部には、クワメミティゲというヌディバがあり、そのまた下部にはイブウェ・ラ・ムベーという別のヌディバがあって、各々から水路が分流していることが判った。この一連の水路を使用している農民(水利組織のメンバー)の数は59名で、うち3名は女性の土地保有者であった。親族関係については、47名は、メンバーの誰かと相互に親子あるいは兄弟姉

妹関係にあることが判ったが、それ以上詳しくは判らなかった。ほとんどのメンバーはムサング・クランに属していたが、文化委員長の老人とその弟、息子の3人はムクウィズ・クランに属し、他に4人のムラチャ・クランの者がいた。他の村に移住したが今でも土地を保有し、メンバーにもなっているものが4人（うち2人は女性）いることも判った。

マレンゲ・チニの歴史については、現在の水番サイディの6代前の祖先ヌザノが最初の建設者で、ヌザノの兄が別の水路、マレンゲ・ジュウの建設者であった。今までの水番は必ずしもサイディの直系の先祖になっていたわけではなく、このリネージの誰かがなっていたのである。以上から確かめられたことは、この水利組織は、いぜんとして親族組織を基礎にしているが、メンバーには親族外の、他の地区から移住して来た者も入っており、逆に他の村へ移り住んだ数名の者もメンバーとして残っているということであった。

#### 4 伝統的水利組織と近代的村組織

ヌドルウェ村では、このように伝統的水利組織が立派に機能していたが、しかし将来どうなるかということになると、水番のサイディ自身も不安を感じているようであった。村の老人たちも同じ思いをいっているらしく、1年前の1990年に村の会議で老人たちはこの問題をとり上げ、水利組織を村が責任を持って維持していくような規則をつくるようにと働きかけたという。他の村では、すでに水利組織を維持管理する若者がいなくなり、老人たちの嘆きのタネになっているが、この村では、43歳のサイディをリーダーとし、村出身の農業普及員などの若者が、水利組織を何とか村の組織の中に位置づけようと努力している。サイディ

の考えは、この伝統的組織は、自分たちの立派な文化なのであるから、村行政の中で、村の文化委員会を水路の維持管理の責任者として認知し、共同奉仕の呼びかけを村の行為としてできるようにして欲しいというものであった。サイディは、自分が水番をしているマレンゲ・チニ水路のみならず、村の水路すべてを調べ、各々の組織を整えて、村管理の水利組織として発展させるという展望を持っていた。彼は私をこの考えの賛同者として引き入れたいと思っていたに違いない。また私はアフリカの大規模灌漑計画が農民組織と折合いがつかずに、いつまでも土着化できない例をいくつも知っているので、このような自生的な組織づくりには大賛成であった。しかし私の見るところ、村行政の中核にいる人たちは、サイディが持っているようなダイナミズムは持ってはおらず、新しい組織づくりに関する合意が得られるかどうか、彼の今後の苦勞が思いやられた。私がサイディと彼の弟、およびムクウィズ老人と一緒に、山を歩きながらヌディバを点検していた時に起こった出来事は、伝統的水利組織を近代的村組織に接ぎ木することの難しさを象徴していた。サイディの弟が、あるヌディバについて、これはもともとムサング・クランが建設したものだといひ出し、それはどうあれ、ムクウィズが管理を代々まかされてきたと主張する老人との間に口論が始まったのである。親族組織から地縁組織へという変化も、個別に見れば種々の権益がからまって複雑な問題が存在することに気がつき、私ははっとした。私のヌドルウェ村訪問が村の中の古傷を掘り起こしてしまい、予期しなかった紛争を村の中に巻き起こし、サイディらが推進しようとしているような、伝統の新たな発展の道が閉ざされてしまうことのないよう、願わずにはいられなかった。

（よしだ・まさお／中部大学）